氏名	河野 眞
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	論文博第508号
学位授与の日付	平成18年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	ドイツ民俗学とナチズム

論文調査委員 (主査) 教授 西村 雅樹 助教授 松村 朋彦 教授 服部 良久

論文内容の要旨

民俗学に配するにナチズムという政治史上の用語の組み合わせは、一見、唐突に映るかもしれない。あるいは逆に、民俗学の一般的な特徴を知る人なら、民族主義的・全体主義的な政治体制にそれが重なって行くのは予想される展開であるとして、むしろことさら取りたてることに違和感を抱くであろう。いずれも無理からぬ反応であるが、そうした予想をしなければならぬことが、すでにドイツ語圏の民俗学についてほとんど情報がもたらされていないことを証している。本論文のテーマは、決して論者が恣意的に設定したものではない。ドイツ語圏の民俗学界での長期にわたる問題意識と連なっており、またそれへの独自の考察でもある。事実、民俗学とナチズムという問題は、第二次大戦後のドイツ民俗学界における最大の課題の一つであった。しかも、多くの課題の一つというより、他の諸々のテーマも、多かれ少なかれこれと関連していたのである。しかし、注目すべきことに、それらに関する情報の不足にもかかわらず、日本では、ドイツ語圏の民俗学書は、頻繁とは言えないにせよ、西洋理解に関わる幾つかの分野において活用がなされている。その場合、彼の地で民俗学がたどった歩みを踏まえていないために、誤認や当て推量が起きている。ナチス・ドイツへの同調が咎められてきた人物の著作が、一般向きの書物の底本になっているといった現象すら見られるのである。また民俗学に対しては、文化史の裏話の供給や、奇抜な着想への刺激が期待されることもある。そうした現状に論者は疑念を抱き、ドイツ語圏の民俗学とはいかなる学問であるかを問い、またそれを通じて民俗学の課題を検討している。

民俗学という専門学の成立は一般的には近代世界の展開にその必然性を負っていると言えようが、歴史的には、ロマン主義以来のドイツ文化、とりわけゲルマニスティクと絡み合って推移したところがある。そうしたドイツ語圏の民俗学がたどった経緯やディシプリンとしての問題性に、論者はかねて注目してきた。とりわけ、民俗学の成立と展開における思想的基盤や背景を検討する必要性、また関係する専門知識としては学史研究が必要であることを指摘してきた。本論文は、それをまとめたものであり、「ドイツ語圏の民俗学とは、いかなるかたちをした学問か」との問いを、相互に関連する10の個別テーマの下に綴ったものである。内容に即して言えば、本論文が主に扱うのは、ナチズムとの関係において凝縮して現れた民俗学の原理と方法をめぐる諸問題である。

第一部「ナチズムとの関わりからみたドイツ民俗学の諸相」

本論文は二部から成り、その第一部は、20世紀の初め頃からナチ政権時代までを対象としている。しかし編年体的な叙述ではなく、幾つかの個別テーマを設定する形態をとっており、広い意味で思想史的な考察である。

第1章「民俗学における個と共同体—20世紀初頭のフォルク論争を読み直す」

ドイツ語圏の民俗学には幾つかの流れがあるが、一般的にも影響力を持ったのは、ロマン派思潮の流れを汲んで、19世紀半ばから後半にグリム兄弟の弟子にあたる人々によって形成された潮流であった。しかしその原理と方法には問題があり、それは20世紀へ入る頃から当時の若手研究者が強く意識するところとなった。そして20世紀の初頭から20年以上にわたって「民俗学の本質論争」(日本での1960年代の紹介)とも称される大きな論議が起きた。しかし、多くの才能が参画した長期の論争にもかかわらず、問題の解消には至らず、それが、やがて民俗学が直接・間接にナチズムと重なって行くマイナスの素

地となった。一口に言えば、方法論に欠陥があったのである。しかしまた、民俗学の原理をめぐって集中して議論がなされたことは、たとえそれが所期の成果に至らなかったとは言え、後世にとっては教訓やヒントを汲むべき泉となった。その事情を、スイスのエドゥアルト・ホフマン＝クライヤーによる発議（1901年）をはじめ、ゲルマニストのアドルフ・シュトラック、民俗歌謡研究の定礎者ヨーン・マイヤー、神話学のアルブレヒト・ディーテリヒ、北欧研究家オイゲン・モーク、民俗の二元論を説いたハンス・ナウマン、そして心理学的方法を標榜したアドルフ・シュパーマーなど、関係者の論述を追い、コメントをほどこしている。なお、一連の論争を挫折に向かう推移とした基本的な構図は、本邦でのこれまでの受けとめ方への根本的な修正でもある。

第2章「ドイツ思想史におけるフォルクストゥームの概念」

ナチス・ドイツについては、その語彙使用の特異性が指摘されることがあるが、事実、ドイツ文化の伝統に深く根差した幾つかのキイ・ワードが一種宿命的な役割を果たした。「フォルク」がそうであり、民俗学をも意味する「フォルクスウンデ」もそうである。ここでは、同種の問題性が凝縮したのものとして、「フォルク」(Volk)の派生語である「フォルクストゥーム」(Volkstum)を取り上げ、19世紀初頭に体操教育家フリードリヒ・ヤーンが提唱した後、紆余曲折を経てナチ時代の語法に至るまでを具体例に即して考察を加えている。とりわけ、ナチ政権成立前後の時期に、さまざまな潮流やグループが、それぞれの思念をフォルクストゥームの術語に込めたこと、しかも相互の異同が鮮明に意識化されずに推移した独特の混迷を解きほぐしている。

第3章「ゲオルク・シュライバーの宗教民俗学」

宗教民俗学に目配りしているのも、本論文の特徴である。ここで宗教民俗学 (religiöse Volkskunde) と呼ばれるのは、キリスト教会に関係した民俗、すなわち「教会民俗」である。日本において仏教民俗学がかなり遅くなって成立したのとも期せずして通じるところがあるが、ドイツ語圏でもキリスト教に関わる民俗学の形成は遅れ、しかもそれはアカデミズムとしての民俗学の中心的組織である「ドイツ民俗学会」の周縁部においてであった。また「宗教民俗学」の術語そのものはプロテスタント教会において20世紀初頭に提唱されたが、その本格的な展開を問うなら、それは、ナチズムが臺頭し勢威を揮うようになる時代状況において、教会の側からの民衆結集という現実的な要請とも重なりつつ形をとった学問分枝に他ならなかった。その事情を、その時期の中心人物であるカトリック教会の歴史家にして中央党国会議員でもあったゲオルク・シュライバーに焦点を当てて考察している。シュライバーは学問史に屹立する碩学とされるが、抵抗者の側面を見せながら、同時に、ナチズムとの重なりが指摘されることもある。その二重の評価に設問を借りて、ドイツでも本格的には取り組まれてはいないその思想を、時代思潮と文体・語法の両面から分析している。

第4章「ナチス・ドイツに同調した民俗研究者の再検討—オイゲン・フェーレの場合」

第5章「民俗学と非ナチ化裁判—ハイデルベルク大学教授オイゲン・フェーレへの裁判の判決文にちなんで」

ナチズムに同調した民俗研究者の経歴や活動を観察することを通じて、問題圏を具体的に検討している。取り上げられているのは、典型的な御用学者であったハイデルベルク大学教授オイゲン・フェーレである。その経歴と活動を学界の一般的趨勢のなかに位置づけることにより、その逸脱が特定の個人に特殊なものではなく、ヨーロッパを広く覆った時代思潮とつながることを解明している。またフェーレに近かったセミ・プロの一人を例にとり、民俗伝承の現場の問題性を取り上げると共に、そのアカデミズムとの関係にも注目している。さらに、フェーレに対してなされた戦後の非ナチ化裁判を取り上げ、判決文について、ナチス加担者への追求と、その緩和の両面から分析を試みている。

第6章「ナチス・ドイツの収穫感謝祭—ナチスのプロバガンダに民俗イベントの源流を探る」

ナチス・ドイツが民俗学の対象と直接的に接触したためざましい出来事として、収穫感謝祭に注目している。ハーメルン近郊ビュッケベルクを主会場としたイベントの実際、特にその第一回にあたる1933年の催しをナチスの機関紙によって復元すると共に、それを構成する諸要素を民俗学史を踏まえて分析している。ニュルンベルクでの党大会と並ぶ大イベントであったが、本邦ではほとんど知られていず、また有名であるにしてはドイツ学界でも本格的には解明がなされていない対象である。

第二部「第二次大戦後のドイツ民俗学の展開とナチズム問題」

ドイツ語圏の民俗学は、ナチス・ドイツに同調した過誤のために、戦後、社会的にも指弾され、信用を失墜した。その克

服過程を整理することを通じて、生活事象をめぐる学問である民俗学のディシプリンとしての課題を検討している。時間的には、戦後まもなくから1980年代までを扱っている。考察の方法としては、ナチズム問題と現代社会との取り組みという二つの焦点をもつ楕円のような構図を設定している。その際、章ごとにやや違いが見られるが、それは、内容に即してそれぞれ異なった手法による叙述を試みているからである。

第7章「過去の克服の始まりとスイス＝オーストリアの民俗学」

民俗学は、その名称が“Volkskunde”であり、同じ名称を名乗る諸々の疑似学問と自己のディシプリンを区別してこなかったため、さらに事実として内部に歪曲を抱えていたため、ナチ時代の過誤を咎められることになった。戦後まもなく、民俗学の犯罪性を問うた代表者は、社会学者ハインツ・マウスであった。それに対して、戦後学界の中心人物となったヴィル＝エーリヒ・ポイカート（ゲッティンゲン大学教授）が、前代の時流に流されなかった自己の経歴を背景に応急的な反論を行なった。しかしマウスの批判（1946年）は大局的には民俗学の欠陥を言い当てていたため、それは、その後の見直しへの強い刺激となった。またそうした応酬と並行して、専門学を再建する動きもかなり早くから起きていたが、特徴的なことに、それは、ドイツ語圏のなかでも戦争責任を免れていたか、その程度が低かったスイスとオーストリアの学界であった。前者ではチューリヒ大学のリヒャルト・ヴァイスが、現代民俗を射程において進めていた研究方向を大著『スイスの民俗学』（1946年）として刊行した。またウィーンのオーストリア民俗博物館長レーオポルト・シュミットが、早くナチ時代に少壮の研究者として標榜していた「思想（＝イデオロギー）無き民俗学」という行き方を方法論（1947年）として確立させた後、本格的に活動を開始した。再建事業の第一世代を代表するこの二人の民俗学の構想について、その特徴を、後に指摘されることになる限界も含めて学史上に位置づけている。

第8章「ドイツ民俗学の諸動向」

西ドイツの民俗学界が本格的に新たな動きを見せたのは、戦後10年余りを経た1950年代後半からであった。戦争責任の点でナチス・ドイツの後継国家たらざるを得なかった複雑な条件が、遅滞や逡巡を余儀なくさせたところがあったのである。しかし学界の規模も大きく歴史も厚いだけに、一旦その動きに向かうと、方法論的にも多彩な展開が見られた。最終的には「イデオロギーと決別した民俗学」という言い方が定着すると共に、これまでとは違った方法論による「工業社会民俗学」、「引き揚げ民民俗学」、「歴史民俗学」、「法制民俗学」などが標榜された。また民俗学の基本に関わる方法論の見直しとして、ネオロマン主義の払拭が進行した。すなわち、19世紀後半にヴィルヘルム・マンハルトによって確立され、イギリスのフレイザーにおいて肥大化と一般化を見ていた手法を否定する動きであり、本章では、これを先行者たる1930年代以来のスウェーデン学派にも注目しつつ整理することに重点の一つを置いている。

第9章「ナチズム民俗学とフォルク・イデオロギーというテーマの登場」

ドイツ語圏の民俗学界において、民俗学とナチズムというテーマが明確な形をとったのは、チュービンゲン大学教授ヘルマン・パウジンガーによってであった。あるいは、それまでの問題の立て方とは、質を異にした取り組みと言ってもよい。すなわち、ドイツ民俗学のナチズムへの相乗は決して偶然的・部分的なものではなく、民俗学の生成以来の本質と深く関係しており、それゆえ「ナチズム民俗学」という形で鮮明になった誤謬は民俗学の一般的な弱点につながるもの論であり、それを踏まえて民俗学のあり方を問うたのである。本章では、1960年代に学界の改革者として登場し、その後、今日に至るまで国際的にも刺激を与えてきたパウジンガーの民俗学の構想を系統的に取り上げている。初期の口承文芸研究から、引き揚げ民民俗学における新機軸、そして主著『科学技術世界のなかの民俗文化』（1961年）である。ナチズムおよびナチズム民俗学を直接扱った論考が著されたのは1965年で、それまた反響を呼んだ。その主張を分析すると共に、パウジンガーの門下生ヴォルフガング・エメリッヒが師の構想を敷衍したフォルク・イデオロギーと民俗学に関する研究（1968年、1971年）も取り上げている。またそれらが1970年前後の世相とも絡んで、民俗学界に波紋を呼んだ様子を概観して、問題点を整理している。

第10章「1980年代以降の状況—ミュンヘン・シンポジウムを枠組みとした観察から」

1986年に「民俗学とナチズム」のシンポジウムがミュンヘン大学で開催された。本章は、これを起点としてその前後左右に広がる議論と紛糾を観察し、それを通じてドイツ語圏の民俗研究者にとってのナチズム問題の今日につながるパラダイムを整理したものである。図式的に言えば、1970年代までは、ナチズム問題は民俗学の構想や方法論と密接に関連したテー

マであった。それに比べると、1980年代以降は、時間が経過したこともあり、歴史問題あるいは現代史のテーマとして取り組むという性格に変質してきている。同時に、それは個々の研究者のナチ時代の言動を洗い直すという作業でもあるために、親族、師弟、同窓といった人間関係などが絡み、感情面まで含めた激しい対立が発生した。またそれを通じて、ナチス・ドイツへの関与とは何であったのか、何を基準に判定するのかといった問題が浮上した。それを追跡し独自に構成しているのがこの最後の章であるが、事態が完結した過去ではなく、今後の展開に向けて開かれたものと見るべきとの観点に基づき、フォークロリストを対象としたフィールドワークの性格を持っている。

論文審査の結果の要旨

本論文の論者は、当初ドイツ文学の研究に携わり、後にドイツの民俗へと関心の幅を広げた。その研究を進める過程で、ドイツ語圏の民俗学にとってはナチズムとの関わりが避けて通れぬ問題であることを痛感し、近年その解明に取り組んできた。本論文はその成果を集大成したものである。紙数は、400字詰め原稿用紙に換算して1800枚余りに及ぶ。ナチズムとの関係において明らかになった、ドイツ語圏の民俗学の原理と方法をめぐる諸問題の分析を通して、ドイツ語圏の民俗学とはどのような学問なのかということが解明され、ひいてはこの学問がナチズムの形成に何故に抵抗できなかったのかを追求されている。ドイツ語圏の民俗学の成立と展開における思想的基盤や背景を検討するにあたって、論者が特に注目するのは、この学問とロマン主義以来のドイツ文化、ことにゲルマニスティク（ドイツ語学ドイツ文学研究）との関係である。この問題を中心に思想史的な考察が進められている。

本論文は二部構成となっている。「ナチズムとの関わりからみたドイツ民俗学の諸相」と題する第一部では、二十世紀初頭からナチス政権時代までが対象とされている。第一章「民俗学における個と共同体」においては、民俗学（Volkskunde）にとって要とすべきフォルク（Volk）の捉え方をめぐって数十年にわたり展開された論争が詳しく跡づけられている。民俗学の原理という本質的な問題を扱いながらも、この論争には徹底性が欠けていた。ナチズムとは直接関わるものではないこの論争のあり方に、論者はこの学問がナチズムという思想潮流に抗しえなかった理由を見て取っている。第二章では、十九世紀初頭から使われ始め、その後多様な意味合いを帯びるにいたったフォルクストウム（Volkstum）という語をめぐる思想の展開がたどられている。ことに、ナチス政権成立前後の時期に、相異なる思想潮流や団体がこの語にそれぞれ独自の意味を持たせた混迷する時代状況があったことが明らかにされている。第三章ではカトリック系の宗教民俗学者であり政治家としても活動したゲオルク・シュライバーが取り上げられている。シュライバーは宗教民俗学という分野での最大の学究とみなされている。しかしその学問は、ナチズムとはかけ離れているものの重なる面も持つ問題性をはらむものであると指摘されている。第四章と第五章では、ナチスに同調した民俗学者の事例としてオイゲン・フェーレが扱われている。この典型的な御用学者の経歴と活動を学会の趨勢に位置づけることにより、その逸脱が特定の個人に特殊なものではなく、ヨーロッパを広く覆った時代思潮とつながることが解明されている。第六章で取り扱われているのは、ナチス・ドイツの収穫感謝祭である。重要な国家行事であったにしては実態が十分明らかにはされていないこの行事の様子が、当時の資料をもとに復元され、民俗的要素との関係が検討されている。

全四章から成る第二部では、第二次大戦後のドイツ民俗学の展開が、ナチズムに関わる問題を中心として、民俗学における現代社会との取り組みとも重ね合わせて論じられている。第二次大戦直後、ナチス支配期における過誤を咎められることになった民俗学を再建する動きは、スイスとオーストリアにおいてまず見られた。現代の民俗にも注目するリヒャルト・ヴァイスならびに「イデオロギー無き民俗学」を標榜するレーオポルト・シュミットの構想が、学史上に位置づけられている。西ドイツでは1950年代後半から活発な動きが見られるようになった。工業社会民俗学をはじめ多様な展開が示された方法論上の特徴は、先行者たるスウェーデン学派への評価ならびにネオロマン主義的傾向の払拭という点にあった。民俗学とナチズムの関係を最も鋭く追及したのは、民俗学の方法論上の改革者として国際的にも著名なヘルマン・バウジンガーであった。彼の見るところ、「ナチズム民俗学」という形をとって鮮明になったドイツ民俗学の問題は、この学の生成以来の原理と深く関わっているものであった。その門下生ヴォルフガング・エメリッヒ等により、ナチス支配期の民俗学者の言動への追及はいっそう先鋭化した。そのような批判に対しては少なからぬ反発も生じた。時間が相当経過した近年ようやく、この種の問題も歴史上の問題という性格を帯びるようになってきている。こうした経緯が詳しく、なおかつ一定の立場に偏らずに論

じられている。これら一連の記述は、問題の当事者とは距離を置く者にして初めて可能であったとみなせる。

以上のような論を進めるにあたって、論者はドイツ民俗学史に関わる書物や論文はもとより、未公刊資料やナチスによるパンフレットの類まで圧倒されるほど多くの文献や資料を探索し収集している。しかもそれらの文献や資料が十分引用され、精緻に論が展開されている。それゆえ、日本では現代においても、ナチズムとの関わりで問題のある民俗学上の学説が横行しているという論者の批判は、説得力あるものとして受けとめられる。労作という言葉がまさにあてはまる本論文は、民俗学だけではなく、西洋史学や社会学等の隣接諸学にとっても益するところが大きいと思える。ことにドイツ文学研究にとっては、グリム兄弟をはじめとするロマン派ならびにその影響を受けた文学や思想に関して、再考を大いに促されるところがある。なお、本論文の充実した内容からすると些細なことではあるが、誤植がやや目につくのは惜しまれる。本論文において主に扱われているのはナチズムに関わる問題である。しかしそれだけにはとどまらず、この重要な問題をも包摂する問題意識が論者にはあるということが、論文の随所から窺われる。それは、民衆の心性の解明を含め、ヨーロッパにおける知のあり方を根本的に見直そうとするものである。この問題意識に基づく研究のさらなる展開が期待される。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2006年2月21日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。